



## 目次

- ・お礼と現状報告 SCC (Save the Children Centre) 代表 菊本 照子
- ・人を大切にすること (金沢)聖霊病院 児童3施設統括施設長 安川 実

### アサンテ ナゴヤと菊本さんとの出会い 理事長 石川 佳子

私どもアサンテ ナゴヤと菊本照子さんとの出会いは2009年のリサーチの旅でした。菊本さんが2007年に受賞された吉川英治文化賞の新聞記事を読んだ参加メンバーが、是非菊本さんのマトマイニ孤児院を訪問したいと熱望したからです。私たちはケニアの地に根を下ろしていらっしゃる菊本さんの生き様にととても感銘を受けました。その後しばらくは訪問する機会がありませんでしたが、数年後からは日程を調整して数回マトマイニを訪問させていただきました。工房で作られたアニマルたちは医療キャンプに参加してくださった方々に大人気でした。

現在、現地は大変な状況にあるようですが、ママたちのフェルト工房の一日も早い復活と、菊本さんのご健勝を心から願っております。



### お礼と現状報告

SCC (Save the Children Centre) 代表 菊本 照子

まず、SCCのケニアにおける活動に対し、長年に渡り多大なご支援をいただき、誠に有難うございます。SCC (Save the Children Centre) は1984年に設立されたケニアの草の根NGOです。

1987年にマトマイニ孤児院を開設し、孤児や困窮状態に置かれた子どもを保護・養育してきました。

1999年、同孤児院の敷地内に日本国外務省の助成金を受け、住民に無償で職業訓練を提供する工房を作りました。持続可能な物づくり工房をめざし、売れる物を模索し10年以上の試行錯誤の結果、ヒット作品が出ました。



それがフェルトアニマルです。ケニア産の羊毛を使い、貧しいシングルマザーの手で丁寧に作られる象やキリン等はケニア・日本のみならず欧米諸国からも注文が相次ぐ人気商品となりました。ケニア訪問中のアサンテ ナゴヤのメンバーの方々もご多忙中をお立ち寄り下さり、作業の様子を見ていただき、沢山のアニマルをお買い上げになりました。作り手のママ達の大きな励みになりました。

順調に発展していたフェルト工房は、2020年コロナ禍により閉鎖せざるを得ず、私自身も日本に帰国しました。失業した23人中、病死した2名を除き、ママ達は出稼ぎや日雇い仕事をして逞しく生き延びていました。しかしながら3年間閉鎖していた工房は、問題が山積み。「再開のために何が出来るか？」を見極めに5月にマトマイニに行きました。大量の水を使うフェルト工芸に十分な水がないこと、原毛や道具機材の調達の高難なこと等々、確認しました。それでも「やってみましょう！」と4名のママが作業を始めました。

9月にはマトマイニ孤児院出身のモニカも加わりました。フェルトボールのキーホルダーやアクセサリでは誰にも負けない腕を持つモニカですが、教会が運営する小学校の先生として正規雇用の教職を得たばかりの今、辞める訳にはいかなないので、土曜日だけ工房の仕事をする二刀流のママです。写真は、やっと入手できた原毛を手を持って喜んでいるママ達。左がモニカです。



マトマイニの近くに、ノーベル平和賞をアフリカの女性として初めて授与された故ワンガリ・マータイ女史が提唱されたグリーンベルト運動の研修所があります。彼女に感化され、荒れた土地を開墾し植林を続けた結果、マトマイニには緑豊かな森が形成され、果樹や有機野菜栽培の他、牛、豚、やぎ、鶯鳥、鶏、兎を飼育し、一時期収入向上に大きく貢献しました。いわゆるアグロフォレストリー（森林農業）です。アフリカの持続的開発の根幹をなすべきではないかと、SCCは都市スラムでも地方の農村でもサバンナのマサイ族の村でもアグロフォレストリーを啓蒙してきました。

残念ながら2014年以降は、気候変動による乾燥化が進み、マトマイニの農園の野菜栽培と家畜の飼育は断念しました。茶色の乾いた畑を見て嘆息する私に声をかけたのが、カマウ・ムルククでした。彼



は有機農業の専門学校で学び、有機農業のコンサルタントとして独立して仕事をしています。近所に住んでいるのでマトマイニの農園再生を手伝おうと申し出てくれ、手始めに壊されたフェンスの修理を担当し、その後も苗床を作ったり畑に苗木を移植したりと、活動を続けています。時々降る雨を有効活用して少しずつ緑を増やしているようです。

写真左のマーガレットはボメットという町に位置する、ケニア最大のミッション系の総合病院の看護師長として働いています。「ボメットに移住して真っ先に家の周りに木を植えました」と言っていました。右はカマウ・ムルクク。2人ともマトマイニ孤児院の第一期生です。

40年を過ごしたケニアの地をコロナ禍で離れることになりましたが、個人的な健康問題も含め様々の課題があり、現在、長期のマトマイニ滞在は困難な状況です。厳しい現状ですが、マトマイニ孤児院で育ち社会に巣立って行った子ども達の多くがケニア市民としてマトマイニスピリットを持って社会の底辺を支えています。それは大きな誇りであり、喜びでもあります。

今後もケニアのマトマイニ（希望）を育てる活動を続けて行く所存ですので、ご理解・ご協力をいただきますようお願いいたします。

## 安川先生をお招きして 副理事長 内海 眞

私事になりますが、昨年の12月から時々金沢の聖霊病院に出向いております。病院と同じ社会福祉法人に属する愛児園（養護施設）は、親と同居できない子どもたちに生活の場を提供する施設です。ここで安川先生に出会いました。先生はいつも穏やかな口調でお話になりますが、先生の根底には「ひとを大切にすること」という強くかつ揺るぎない信念があります。施設の運営にはお金、建物、設備、人材など多くのファクターが必要になりますが、先生は何よりもこの信念を最重要視されており、実際にその信念を実践に移してこられました。先生は問題のある子どもを御自身の家に招いて一緒に生活してきて、とことんその子どもに寄り添おうとされてきたのです。我々の活動が本当に「ひとを大切にすること」精神に沿ったものであるのかどうか、今一度見直す機会にすべく、先生をアサンテ ナゴヤ総会にお招きし、ご講演をお願いした次第です。

## 人を大切にすること

(金沢)聖霊病院 児童3施設統括施設長 聖霊愛児園 安川 実

この度アサンテ名古屋の2023年度総会で「実践報告」の機会を頂きました。具体的には私の半世紀以上にわたる「児童養護施設体験」です。正確には、親から離されての生活を余儀なくされている子どもたちを教え育てるというより、子どもたちから教えられ育てられたという（きれいごとではない）実体験です。



39歳で聖霊愛児園に入職した時、園内は荒れていて、職員も困っていましたが、子どもが一番困っていると感じました。子どもたちは自分で選んで施設に入ってきたわけではありません。それまでの子どもたちとの関わりのなかで、子どもの問題は大人の問題だと感じていましたので、労働条件を「改悪」して、夜は子供が寝るまで一緒に居る体制をつくったり、一年かけて職員と一緒に養育理念をつくったりしました。

子どもは正直で、一年くらいで園内は落ち着いてきましたが（勿論「問題」は常にありましたが）、その一方で、自分の内に「おまえ（たち）は、子どもに向き合う大人としてそれでいいのか？」という疑問も芽生えていました。

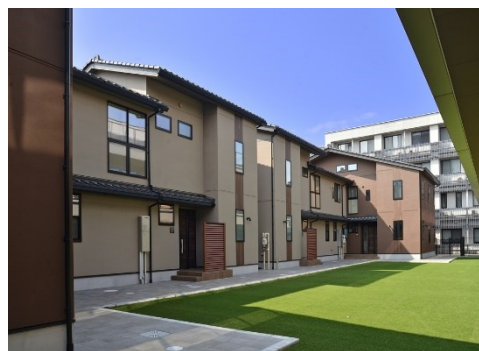
新人職員は学校で勉強してきますが、子どもにすぐ見抜かれます。新人職員も目の前の子どもが学校で学んだことと違うことに気づきます。そこで、新人職員は一年間施設長と一緒に学習会をすることにしました。河合隼雄氏の「おとなになることのむずかしさ」をテキストに、支援の現場の職員だけでなく事務の人なども含めて学び合い、現在も続けていますが、この学習会は当園の教育理念を感得するのに役立っていると思います。

新人だけでなく全職員の研修として、自分自身を振り返ったり、「生きる」とはどういうことか等を考えるための学習会も始めました。第一回目は精神科医である石川憲彦氏の「子育ての社会学」をテキストに学び始め、17冊目になる現在は（自閉症の）東田直樹氏と精神科医の山登敬之氏の対談集「社会の中で居場所を作る」を読み合っています。ステレオタイプの児童福祉関係書ではなく広範囲の領域でテキストを選びました。その中には「人間の大地」（犬飼道子著）など今でいうグローバルサウスの勉強や、永年ネパールの医療活動に検診した岩村昇氏の活動を描いた絵本なども読みました。

上述の考え方の延長で、3年前から月一回「ビデオ上映会」も始めました。国策の犠牲になっている福島、沖縄をはじめ、地球温暖化や死刑制度などシリアスなものから、音楽、美術、登山などの趣味的なものまで多種多様です。ただし、どの一本も「人間の生き方」という視点を外さないようにしているつもりです。カッコよく言えば、児童養護のスペシャリストの裏付けとなるジェネラリストになることを願う、ということでしょうか。

話を元に戻して、拙文の文頭に「白状」した通り、半世紀余りの子どもたちとのつきあいで今感じていることは、教えてきたつもりが教えられてきたという事実です。筆舌に尽くしがたい重い荷物を背負って施設に入り、厳しい社会で生きている（元）子どもたちとのつきあいが（勿論全てではありませんが）今なお続いているということは「僥倖」以外の何物でもありません。

改めて思います。児童施設には宝がいっぱいあります。子どもは宝です。弱い立場の人間は、その人を大切に作る人間とながると、（大切にしたいつむりの）人間を変え、やがては状況も変える宝になります。現象的なマイナスの裏にはプラスが潜んでいる、と教えられました。現代社会もこのことに気づくと、若者の自殺や犯罪を「自己責任」で処理せず、「人間」ではなく「モノ」中心であると反省させられるのではないのでしょうか。



アサンテの会の皆さまの会議の中での私への質問や、懇親会での会話の様子から、皆さまも、関わっている国やその国の人達からたくさん大切なことを学んでいらっしゃることが感じられました。貴重な出会いを有り難うございました。

## お知らせ

2024年5月（予定）

2024年度第1回総会

**\* 会費、賛助会費、協賛及び寄付金をいただいた企業・団体および個人（敬称略）**

（2023年4月1日から2023年10月31日までにご支援をいただいた皆様です）

坂光信夫、尼子道子、内海みどり、乾朋子、竹内仁美、内海眞、森下理香、加藤万理、宮本信代、石川佳子、石居尚子、土屋二郎、小田賢一、小田キミエ、川田初美、黒宮隆男、服部万里子、杉山恵美子、石丸佳代子、遠藤清美、青木孝夫、野々山洋子、片桐初男、鈴木泉、大岩洋子、宮田靖志、花木達美、（有）ヤマ土地、宗賀浩子、服部将也、見田くるみ、片岡紀子、森山勝文、手塚和子、井上重夫、山田洋平、宮城島拓人、平野吉廣、岡田智子、石井圭子、青山純也、眞崎満代、堀井城一朗、杉江修治、野村浩子、住友正武、住友光子、土屋久仁子、丹羽咲江、中野朋儀、玉木奈美枝、石川博司、石川美里、飯田展弘、山本由紀、大下博、森岡悠、伊藤絹代、杉崎卓也、美濃和茂、百合草宮子、西尾栄子、森本明子、河津芳子、小島美恵子、城戸康年、平野雪夫、高取幸江、杉本みな子、国際ソロプチミスト名古屋一中、山根和彦、長岡哲輝、鶴飼利子、山本直彦、渋谷伸子、安江佐和子、石田義人、日比野福代、日比野丈夫、日比野公治、日比野祐士、知光祐希、藪下彩子、白野倫徳、村井謙治、光川千鶴子、安藤かな子、坂元るり子、坂田侑平、山内礼子、宮下悠子、石黒博人、村瀬幸子、合原年子、岸田義昭、ユニバーサル基金、麦谷郁子、佐藤陽太、碓氷和子、榊原薫、谷川正実、森田諒、AOI 募金

**\* 今後ともご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。**

事務局：名古屋市東区葵 1-25-1 ニッシビル 906 TEL/FAX：052-933-1588 HP：asante-nagoya.com